

復興事業の陰の立役者 「コーディネーター」に会いに行く

末祐介 正会員 中央復建コンサルタンツ(株) 社会インフラマネジメントセンター

近年、土木の仕事や専門領域は一層広がりを持ち、多様な人を歓迎するドボクへと変化している。本連載では、少し特殊な経歴や分野から関わりを持たれる土木技術者の方を紹介し、今後求められるドボクへの関わり方について考えたい。第1回である今回は末祐介氏にお会いした。宮城県女川町の復興事業から見てきた「コーディネーター」の姿とは。



末祐介氏
SUE Yusuke

京都大学大学院農学研究科修了後、1999年に中央復建コンサルタンツ(株)に入社し、地域計画室に配属。2011年6月より宮城県女川町の復興を支える土木プランナーとして女川町のまちづくりに関わる。現在は、合同会社モノコトビトCEO、女川みらい創造(株)取締役も兼務する。

女川町の復興事業「どこからでも海が見える町」

今回お会いした末祐介氏は、東日本大震災で被災した宮城県女川町にて、被災後2011年6月から復興計画策定の支援や市街地基本設計等を行ってきた。2013年以降は「コーディネーター業務」と任務を改め、外部から専門家を招く体制づくりや各チーム間の調整等、行政と共に復興事業全体のプランニングを行ってきた。女川町はこれまで「どこからでも

限られた時間の中で、町の人々の声を聞きに行くこと

一般的な土木事業よりスピード感を持って進める必要があった復興事業において「コーディネーター」に求められた役割とは何なのだろうか。特に、コーディネーター業務を始めた2013年頃を振り返り、末氏は以下のように述べている。

例えば、昼間のワークショップに参加することができない方々に会うために、夜の飲み屋に飛び込み、普段の暮らしや今後の不安を伺いながら、まちづくりに生かすヒントを引き出していったという(写真2)。実際に、若者との雑談での「お金を使わずに過ごせる場所がない」という何気ないつぶやきからヒントを得て、女川町海岸広場には若者が気軽に集まれる

ス ピード感を持って進めなければならぬという復興事業の必要条件を満たすだけな

例えば、昼間のワークショップに参加することができない方々に会うために、夜の飲み屋に飛び込み、普段の暮らしや今後の不安を伺いながら、まちづくりに生かすヒントを引き出していったという(写真2)。実際に、若者との雑談での「お金を使わずに過ごせる場所がない」という何気ないつぶやきからヒントを得て、女川町海岸広場には若者が気軽に集まれる



写真1 Zoom取材の様子



写真2
夜な夜な飲み屋に集い、まちづくりを語りあう人々
(提供：末祐介氏)



写真3 スケボーパークを利用する若者たち (提供：末祐介氏)

「スケボーパーク」という場所が完成した(写真3)。末氏は、昼間のワークシヨップに限らず、積極的に町の人の声を聞きに行くために、2014年から2016年の間、元々居住していた関西地方から女川町へと移り住んでいる。このような昼夜問わず積極的に町の人に話を伺いに行く行動や、女川町への思い切った転居は、われわれ学生からすると、かなり勇気のいる決断であったように思える。しかし、末氏のお話を伺う中で、この行動の根底には「将来この町で育ち、住み続ける

方々がどのような町にしたいのか」を本気で聞きたい、話したいという強い信念を感じた。他関係者と広くつながりを持つ「コーディネーター」である末氏がこのような信念を持っていたからこそ、現在とこれからの女川町の住民が抱く女川町像を実現する手助けにつながったと思うのだ。

今後、コーディネーターの役割は「職能」として求められる

末氏はこれまで約10年間携わって

きた女川町の復興まちづくりを振り返り、特に「コーディネーター」として貢献できたことについて、以下のように述べている。



「コーディネーターとして、町民、行政、さらに外部から招いた専門家の方々など多くの関係者の中で、それぞれの状況を総合的に把握し、時には関係各所が思っていることを分かりやすく、それぞれに伝達することができたと思います。」

このように、町民や行政、外部の有識者らの状況を総合的に把握し、時にはそれぞれをつなげるコーディネーターの役割は、一般的な土木事業に比べて関係者が多い復興事業では、より重要になると思う。末氏はコーディネーターの役割として、その土地に住む人々の声を土木事業に反映することができると体制を整えることを挙げた。この仕組みはまちづくりとして公式があるものではなく、その地域の実情に合わせたものとして作りあげることが重要であるようだ。さらに、コーディネーターの役割を担う際には、本文中で示したように「人との対

話」が大事であることを理解して臨んだほうがよいと末氏は続ける。このように、女川町の復興まちづくりにおける末氏の取り組みに関して伺う中で、今回紹介した「コーディネーター」は目立たずとも陰でチームを正しい方向へ導く「影の立役者」として重要な存在であると感じた。本文中に示した役割をこなすだけでなく、時には関係者全体を戦略的にマネジメントする能力も求められるだろうと思う。

末氏は、今回紹介したコーディネーターは今後、復興事業に限らず一般的な土木事業において、職業ではなく「職能」として、事業に関わる誰かが担う必要があるだろうと続けた。現在、「土木」は参加者の専門を問わないオープンなものへと変化している。その時、その土地の住民や実際に線を引きデザイン等の参加者らが活躍できるように場を整える「コーディネーター」は、今後より求められるのではないだろうか。

最後に、今回取材に快く対応していただいた末祐介さまに心より感謝申し上げます。

(担当編集委員：宮田比奈、橋本美月)